支那回教徒の運命觀

大峰龍正

山東鐵道の終點濟南市街の一角に高く聳ゆるは千佛山である、之は回教の大寺院として有名である、春の項吾々は教門の門牌ある門の頭に千佛山進香の赤旗の往々に飜へる奇觀を認めた之は各地方から入り込む千佛山詣りに教徒が宿を借してゐるのである、一日私は此處に遊ぶ抑も現今の支那佛教は昔日の如くならず、殊に山東にありては教風殆ど頽れて其の風や實に無殘の有樣である、尤も一見した所では寺院は大きく師傅は多く一寸外見には如何にも盛であるかの樣に思はるゝが、其れはホンの外觀で內部を觀察する時には全く問題にならぬ、毎日御勤めして居る多くの師傅の如きも實は之れで以て只今日の生計を維持するのみに意を用ひ到底敬虔の意から出て居るものとは思へぬ、次に彼等の說く運命觀に就て問へば　爾等如何に聰明なるも未來を窺ふ事を止めよ、爾等の未來は唯眞主獨り知食す爾等の努力は毫も爾等の未來を轉するに功なく爾等の用意も現在の運命を變ずる能はず信者よ唯主命に依つて未來の幸福を祈るべし　とゐる程で甚だ窮屈に說かれ現世に起る禍福吉凶善惡正邪凡ての事象は悉く神意に出づるものであつて眞主は已に豫め定めて居らるゝが只深く其れを祕して知らしめ給はぬのである所謂萬物總ては此の運命に從つて生じ長じ働き死し朽て復審を受けて來世の運命を定められるのであると云ふ、然らば已に豫め左程迄細かに運命が定められて眞主が只示されないばかりとすれば最終日に於て何も審問する必要はない筈である、又人間に取つては何も働き甲斐がない、其の說明をと聞けば「宿命は海の如く自由は船の如し」と云ふ即ちあらゆる宿命は其れ々々其の人に依つて定められてはあるが、其の宿命の範圍內では其の人の望み次第力次第で丁度船が自由自在に大海を航行し得る樣なもので決して規定の道はない、但し如何に自由とは申せ其の海より外に船は到底出づる事

は出來ぬ若し一人が大賢たるの運命があるとし其人が全力を注げば其大賢迄は到達する事が出來るが大賢を踰へて聖域に入る事は出來ぬ其大賢と云ふ程度が即ち運命である、其人の勉强の度に依つては愚に終るかも知れぬ善人で止まるかも知れぬ、愚となり善人となり或は大賢となるは其人の自由で其れには何等の拘束もないが万全の注意を拂わぬに於ては如何に努力するも目的を達し得ないは丁度航海者の不注意にて不慮の難あるのと同じである、人事を盡さねばならぬは其處であると云ふ。

四顧寂莫

三基生

ほんとに寒い又雪でも降りそうである、一昨日の様に降つて〳〵積ればいゝが……そつと萬年筆を拋て灰色の空を見た、もう時計は四時だ、いつもの掃除とは思つたが餘り寒いので湯をわかしてもらつてからにしやうと炬燵に入つたパチン〳〵と櫻炭がはねる掃除を終へて寒風に吹かれ乍ら側の小高い身延ホテルの空地を彷徨した冬枯のお山は靜かな死の沈默にひたつて行く様である、夕陽は已に思親閣の彼方に落ちて色寂れた薄暗は靜かに地を這ひ籠むる、そしてひやり〳〵と肌寒い風がしみ〴〵と食ひ込む様に吹きつける。

靈山を眉前に控へほのかに七面の峰も目に映じ身延町は眼下に見える家並からは夕餉の煙りが淡く立ち昇つて行く谷間のところ〴〵に消え殘つたほの白い雪が枯れた草の上に淋しく息づいてゐて二三羽の烏が鳴きながら舞ひ下りたおど〳〵した瞳であたりをくるりつと見廻りやつと安心した様に歩みながら食をあさつて